

「せとうち発見の道」企画展

「とる・つくる・たべる道具

～食にまつわる道具のイロイロ～

2022年5月31日（火）～8月28日（日）

瀬戸内市民図書館

生きていくための基本となる食。食料確保のための、とる（狩猟・採集・漁労）、つくる（栽培・製塩）、たべる（調理・食器）道具には、様々な工夫があり、技術の進歩や文化の変化を感じさせるものがあります。

残されたこれらの道具、遺物を通じて、瀬戸内市に住んだ人々がどのような道具を使って食料を確保し、食を楽しんだか、再発見します。

◆食卓と台所を彩った昭和の道具

年代不詳（1920～1960年頃か）

旧牛窓民俗文化資料館資料

牛窓民俗文化資料館には、牛窓町地域で使われていた、さまざまな生活用具が多数残されていました。その中から、ごく一部ですが、なつかしい昭和の道具をご紹介します。

なかには、現在あまり見かけなくなったもの、地元の牧場や酒蔵に関する貴重な資料なども含まれています。



◆原始時代の道具（石器①）

石鏃（せきぞく）

弥生時代前期（約2200年前）

門田貝塚（邑久町尾張）

狩りに使われた石の矢じりです。

矢の先につけて使われました。



◆原始時代の道具（石器②）

搔器（そうき）

弥生時代前期（約2200年前）

門田貝塚（邑久町尾張）

皮をはいたり肉やスジを切ったりする道具。

下の面がすどく削られています。



◆原始時代の道具（石器③）

石包丁（いしぼうちょう）

弥生時代前期（約2200年前）

門田貝塚（邑久町尾張）

稲の穂を摘む道具。ふたつ開けられた穴に

ひもを通し、手で握りやすくして使います。



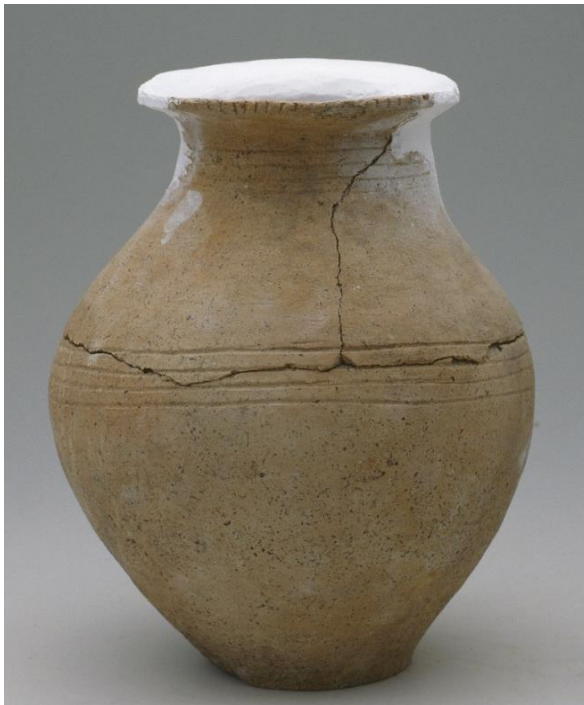
◆原始時代の道具（土器）

壺（つぼ）と甕（かめ）

弥生時代前期（約2200年前）

門田貝塚（邑久町尾張）

壺（左）は食料を貯蔵するため、甕（右）は煮炊き用に使われたと考えられています。



◆古代の塩づくりに使われた土器

師楽式（しらくしき）土器

「師楽（しらく）」は、牛窓町牛窓にある地名です。かつての錦海湾、つまり現在の錦海塩田跡地に隣接する集落です。

1920年代、師楽の地で発掘調査が行われた際、特徴のある謎の土器が大量に見つかりました。謎の土器は、発見地の名をとって「師楽式土器」と名付けられました。

その後、岡山大学教授であった近藤義郎を中心に、大量の師楽式土器が出土する喜兵衛島遺跡（香川県）の発掘調査が行われ、師楽式土器が塩作りに使用された「製塩土器（せいえんどき）」だということが究明されました。

製塩土器は、カップ形になっており、海水を入れて煮詰めるのに使われました。多くは、破損した状態で見つかっています。時代によって形が変わっていきました。

【参考文献】 邑久町史編纂委員会編『邑久町史 考古編』（2006年、瀬戸内市）



製塩土器
弥生時代後期
門田貝塚（邑久町尾張）



製塩土器
古墳時代初頭
尻海長浜遺跡（邑久町尻海）



製塩土器
古墳時代中～後期
門田貝塚（邑久町尾張）

◆原始時代の農具

木製鍬（もくせいぐわ）の未製品

熊山田遺跡（邑久町山田庄）で見つかった木製の鍬（くわ）ですが、未完成品です。刃先まで木製で、身と柄が直交する「直柄鍬」と呼ばれるタイプのようなようです。木質はアカガシと鑑定されています。

弥生時代前期～中期前半の層から出土しているため、この時期（約2200～2000年前）につくられ、何らかの事情で完成されずに廃棄されたものと見られます。

付近で建物の跡も見つかっており、このムラで農耕が行われていたと考えられています。



◆近代の農業機械と長浜村の馬場常二

20世紀に入ったころから、日本でも農業の機械化が始まりますが、藤田農場（岡山市南区）などがあつた岡山平野では、大規模化・機械化などが進み、岡山県は農業先進地となりました。農業機械では、邑久郡長浜村（現・牛窓町長浜）の馬場常二（1892～1947）が、国産初の農業用石油発動機を開発した人物として知られています。

馬場は、大正時代に発動機の研究を進め、大正9年（1920）頃、アメリカ製の「ウィッテ」を原型として、馬力・重量・回転数などに改良を加え、価格も大幅に下げた「馬場式発動機」の製造を成功させました。さらに、大正11年には大橋義男と共著で『最新小型発動機詳解』を出版して注目されました。

馬場は、その後も「馬場式畜力回転機」「馬場式ポンプ」「馬場式耕うん機」などを開発・製造販売しており、岡山県内燃機関工業組合長、岡山県鉄工機械工業組合理事として、業界の指導に大きな役割を果たしました。

1920年代から30年代にかけて、岡山県産の発動機が一気に増産され、普及が進みました。このころ、石油発動機の普及率は岡山県が全国一位となっており、農業の機械化と生産性の向上が進んでいったことをうかがわせます。

【参考文献】南智『農業機械の先駆者たち』（2016年、吉備人出版）